

学籍番号・氏名	20L0025C 小野 はるき	学部	人文
<p>私は今回の講義を受けて、パリ協定のことを初めてちゃんと知りました。その内容が、排出量を抑えることだと思っていたのですが、排出量と吸収量を均衡させて排出実質ゼロを目指すものだということに驚きました。また、世界の中で最も裕福な富裕層の10%が個人消費による温室効果ガスの約半分を排出していることがとても問題だと感じます。化石燃料をあまり使用しなかった途上国か大きな被害を被っている不公平さを正すというパリ協定の理念は大いに正しいと思います。ここまで大きな企業や、国、世界規模で動き、不正することなく規制を守っていけばきっと目標は達成できると思います。逆に言えば、これ以上地球が温暖化することを防げなければ、地球は破滅の一途を辿ると思います。現在、世界の5人に1人(13億人)が電気のない生活をしていることなど、日本人の多くは知らないでしょう。それらがとても深刻な問題であることを多くの人に認知してもらうためにも、やはり大きな企業や国などの大規模で動くことは大切なことであると考えます。経済的な利益利潤のことだけを考えると不利益かもしれませんが、人類全体のことを考えて出来る限りクリーンなエネルギーを使って欲しいと感じます。</p>			
学籍番号・氏名	20L0134J 村山 薫平	学部	人文
<p>自分は今世界史の近代史を勉強しているのですが、11月の時事としてパリ協定について勉強していましたので、今回の講義は非常にタイムリーな話題でありました。表面的なことしか、単なる名称でしか知りませんでした。より詳しく理解することができました。自分の持っている参考書の環境についての文章には、コペンハーゲンビジネススクールの助教授であるビヨンロンブルグさんによると、京都議定書にもアメリカが参加してその義務を履行したとしても、2100年までに温暖化の進行を6年遅らせることしかできないということを述べていることが書かれています。京都議定書については大学受験でもよく出される範囲でありますので、理解していましたし、高校の授業においても深く取り扱った問題であり、地球環境のことを考えた最善のものであるのではと考えていたため、この記述は衝撃的なものでした。しかし、京都議定書に続くパリ協定においてはそれよりも強力な取り決めではないかと個人的に感じているため、期待できるものであると思いますし、アメリカの協定への参加復帰も個人的には期待しています。</p> <p>気候変動枠組み条約について以外においても省エネ、省資源型社会経済への転換ということで「フードマイレージ」という名称は初めて聞きましたが、また海洋におけるプラスチックごみについても言えることですが、日本は豊かな国であるからこそそうした問題がついてくるということが言えると感じます。先進国と言え国々がいかに現在の地球環境に注意を向け、生活をより地球によりそったものにするということが大切であると改めて感じました。</p>			

学籍番号・氏名	20E0121A 成澤 乃彩	学部	教育
<p>家庭からの二酸化炭素排出量で一番多いのが電気によるものだと初めて知りました。およそ半分を占めているということに驚きました。エアコンの使い方を見直すなど、一人一人が今出来る対策をしていくことで地球温暖化という大きな問題に立ち向かえると思いました。また、ガソリン車・ディーゼル車の販売が禁止になるということは聞いたことがありましたが、詳しい年や地域によって規則開始年が違うことを初めて知りました。</p> <p>このことが大きく世の中を変えることは予想ができます。しかし、今現在車を使っている人や持っている人は新しく車を買いなおすのにお金がかかるため、買いなおさないのではと思いました。販売を禁止にしても実際にガソリン車などを使う人がいなくなるのには時間がかかると思いました。この対策の効果が出るまでに他にもどのような対策をしていくかが大事だと思いました。</p> <p>普段当たり前に使っている自販機もたくさんの電気とプラスチックから成り立っていると知って、便利だけれど自販機を無くすことは日本の二酸化炭素削減において大きなカギとなるのかなと思いました。</p> <p>今回の講義を通して、住む場所によってどのような対策を取っていけば良いのか知ることが出来ました。私は将来森林の多い場所に暮らしたいです。その時には薪ストーブを使用したりしたいです。貴重なお話をありがとうございました。</p>			
学籍番号・氏名	20E0123H 長谷川 愛	学部	教育
<p>今回の講義を通して、環境問題に関するリスクや各国の取り組みなどについて深く学ぶことができよかったです。また、たくさんのデータや図を用いてお話してくださったおかげで視覚的にも内容が入ってきやすくわかりやすかったです。</p> <p>海面上昇の被害を受けている国をみて、より強く危機感を感じました。このまま地球温暖化が進行してしまったら、世界中で被害が及ぶ可能性があり、他人事だと思っはられないのだと改めて感じました。日本でも二酸化炭素の排出量を削減しようとする動きなどがみられますが、なかなか難しい問題であるように感じられました。脱炭素社会に向けて省エネによるエネルギー削減が行われたり、再生可能エネルギーの利用拡大が行われていますが、それによって少しでも効果がみられるといいなと思いました。世界中で対策は取られています、一人一人が少しでも地球温暖化の進行を抑制しようと協力する気持ちを持つことが大切だと感じました。自分自身ができることとして徒歩や自転車、公共交通機関を利用しての移動をなるべくするようにしたり節電や節水をするということなどがあると思いますが、それらを心掛けることで何か少しでも環境問題などの解決につながってほしいと思いました。</p>			

学籍番号・氏名	20E0210B 宮澤 里緒	学部	教育
<p>技術や経済が発展していくことによって、人間にとって便利で暮らしやすいものが手に入るようになっていくことは、現在の日々の暮らしのことだけを考えたとしてもいいことだが、長期的な目を見たときにそれが環境に大きな負荷をかけてしまっているのどうにかしなければならないことだと思うし、実際そういった取り組みがなされていることは知っていた。しかし、今の私たちにとっての「普通の生活」をしていくだけでも環境には負荷をかけてしまう。ということは、「普通の生活」を変えなくてはならないということだと思う。世界的に決められた協定や基準、企業が取り組んでいるSDGsなどは最近よく見かけるので、仕事として解決しようとする取り組みはたくさんある。解決しなければならない問題であることは、職場で知っている人は多いはずだ。しかし、それを家に持ち帰って実践している人はそんなに多くはないのではないかと。台風や豪雨などの異常気象で、地球温暖化と言われても実感しないということはないか。実感できるようになったからこそ、危機感みたいなものも感じられるようになってきていると思うので、小さなことからでも「普通の生活」を変えていけたらいいのではないかと思う。</p>			
学籍番号・氏名	20E1109H 寺垣内 海	学部	教育
<p>温暖化によるオゾン層破壊など地球を要点として考えることは多かったですそれが災害を引き起こすということはあまり考えたことがなかったです。海面上昇によって小さい島が消えてしまうというのはテレビなどで見たことがあったのですがそのまま進むと東京ですらそのような被害を受ける恐れがあると聞いて驚きました。昨年のヴェネツィア水没被害は記憶に新しくあのようなことが日本の都市でも起こるとは信じられませんが専門家の方々がおっしゃっているので意識するべき問題になってきていると思います。</p> <p>またこれも少し聞いたことがあったのですが気温が1°C上がるということをどのように考えるかという問題です。一見すると1°Cなんて、と思ってしまうのですが地球の平均気温で考えるとそれはとても大きな変化だそうです。正直に言ってしまうと私も1°Cで何か変わるものなのだろうか、と不思議に思っていました。しかし考えてみればその1°Cが毎年積み重なっていき五年たてば5°C、10年たてば10°Cと考えると深刻な問題であることに気づきました。</p> <p>これは個人的な話なのですがガソリン車販売を禁止されるのはちょっと辛いです。私は趣味でバイクに乗っているので電気で動くものはほとんど生産されていないうえに価格も高いです。完全に自己中心的な考えではあるのですがデザインもいいし環境にも優しい安価なバイクがあれば文句はないです。理想が高すぎるのは分かっていますが…</p>			

学籍番号・氏名	20E1302C 井澤 美咲	学部	教育
<p>今回の講義は、パリ協定を中心とした地球環境問題における温室効果ガスの話だった。まず驚いたのが、産業革命が始まった頃(200年前)と比べて二酸化炭素濃度が1.5倍以上になっているということだ。紀元後のみを考えても、歴史上のたった10分の1の年月で多大に地球を破壊していると考ええると恐ろしくなり、それと同時にその事の重大さを実感した。</p> <p>今回の講義の中で私が注目したのはパワーポイント資料12ページにある円グラフより、「家庭からの二酸化炭素排出量・燃料種別内訳」において「電気から」が最多の48.6%を占めている点だ。それに次ぐ2番目の「ガソリンから」に関しては、ガソリン車を使っている人は二酸化炭素を排出している実感を少なからず感じていることだろうと思う。排気ガスの存在を知っているし、ガソリン車より電気自動車の方が省エネだという知識もあるからだ。しかし、「電気から」に関してはなかなか実感できる項目ではないのではないかと感じる。これは私自身の経験から感じたことである。その経験とは以下のとおりである。実家に住んでいた時は、スイッチを押せば電気がつくし、そのために私たちがしなきゃいけないことは電気料金を契約している電力会社に支払うことだった。確かに、日本における発電は火力が主流で、それには多量の温室効果ガスの排出を伴うということは学校教育で学んではいた。しかし、今使っているこの電気もそうなのだという意識付けはあまりされていないように思える。だから、このグラフを見て正直驚きがあった。私は、こういう意識付けをもっと積極的に行えば、国民自らが節電を心がけようとする動機にもなるのではないかなと思った。</p> <p>今回のこの講義を聞いて、これからの日常生活における電気の使い方への意識が私の中で大きく変わるだろう。大変有意義な講義であった。</p>			
学籍番号・氏名	20E1605G 熊谷 光隼	学部	教育
<p>今回の講義を通して、身の回りの環境に目を向け身近な取り組みを学んでいきたいと改めて感じました。</p> <p>私の地元は飯田です。飯田は地域で地方創生の取り組みが多く行われているイメージが大きくあります。加えて、飯田は環境モデル都市であることを知っていましたが、環境面における詳しい取り組みを知らなかったことに気が付きました。今回取り組みを知り、地元へ帰省した際には実際に取り組みが行われている様子を見に行ってみたく感じました。</p> <p>また、飯田市では地産地消の言葉をよく耳にしますが、その地産地消が環境保全につながっていることを知りました。地産地消の言葉をよく使う飯田市の方々は地産地消の意識が高いと考えました。そして、地域で使われる言葉に意識が反映されているのではないかと感じました。</p> <p>全体を通して、講義のスライドの中には見たことのある建物がありうれしく感じた反面、これまで飯田で過ごしながらも気が付かなかった点も多々あったことに気が付きました。今後自身の生活を見直していくとともに身の回りではどのような取り組みが行われていくのか、身近な建造物がどのような意図で建てられたなど考えながら過ごしていきたいです。そして、持続可能な地域に向けて私も行動をしていきたいと感じました。</p>			

学籍番号・氏名	20E1713D 山野井 玲弥	学部	教育
<p>今回の授業を聞いて、最初全く分からなかったパリ協定などのことをある程度分かるようになった気がしました。世界の地球温暖化対策の歴史は、1992年に「国連気候変動枠組条約」を採択するや2005年に京都議定書が発効されるなど高校の歴史の時にやったなあといったことを改めて確認でき、大事だなと再認識することができました。また、再生可能エネルギーの分野については、風力発電が中国が一番発電設備容量が一位とは知らずびっくりしました。自分の実家が農村部にあり、お風呂を薪を使って火を起こして沸かしているの、ちょっと火を使うから危ないかなと思っていただけ、森林資源を有効に利用していると聞いて、地球にいいことを少しできているのかなと思い、知らないうちにいいこととしていてびっくりしました。後期、ほかの講義で再生可能エネルギーについて取り扱っていて、今回の授業でほかの講義で学ぶことができなかった知識を学ぶことができたので、すごく今回の授業はためになりました。最近、ニュースで、日本政府が2030年までに、ガソリン車をゼロとする方針していると報道していて、それは本当に環境にはいいけれど、実現することができるのかなと思いました。</p>			
学籍番号・氏名	20E1907B 西澤 香鈴	学部	教育
<p>日本が地球温暖化対策で世界から遅れをとっていることを痛感した。平均気温の上昇や大気中のCO₂濃度の上昇など認識していたことも、改めてデータで見ると恐ろしいと思った。また温暖化によるリスクや日本の温室効果ガスの排出量についてお聞きして、何とかしなければならぬという強い危機感を持った。</p> <p>日本は再生可能エネルギーの導入が遅れているため、太陽光発電の普及などが最も必要とされていると思っていたが、各家庭での電気やガソリンの使用を見直し、一人一人の意識の改革も重要で、身近なところから簡単に温暖化対策に取り組めることを教えていただき、大きな改革にばかり目を向けず、今日から自分でできるような省エネなども意識したいと思った。再生可能エネルギー、自然エネルギー発電の導入もやはり早急に進めていかなければならぬと思った。日本には広大な土地がないため、大きな太陽光発電所をつくるのは難しいなどの意見もあり、消極的な考え方もあると思うが、この状況では危機感を持って国で力を上げて早急に導入していく必要があると思う。</p> <p>今回のお話からヨーロッパなどと日本人の意識は大きく異なっているのではないかと思った。質疑応答の場面でも出ていた内容で、日本人の方が環境への配慮を商品を買う際の基準にする人が少ないように感じる。私も消費者としての意識を見直したいと思った。</p>			

学籍番号・氏名	20J1044A 佐藤 匠馬	学部	経法
<p>第11回の環境マインド実践基礎論を受講して、今回はこれまでの持続可能な開発に向けた取り組みの紹介などとは変わって、主に国際的な環境問題の現状や、それを受けての日本の対応などについて深く学ぶことができた授業であったと感じました。</p> <p>冒頭の部分で、温室効果ガスの名称や数値単位、環境問題に取り組んでいる国際組織や国際会議について整理して下さったことは講義全体の深い理解に繋がったように感じました。多くの数値やデータから、日本の環境問題に対する取り組みは、最近色々と始まっているようではあるが、世界的に見るとかなり後発的であるということが深く理解できた。国連に提出した削減目標の目標値が5年前に提出したものと同じであった点などは、温室効果ガス排出の上位として責任ある立場としてとても軽率な行動であり、一日本人として悲しく思いました。</p> <p>また炭素除去技術など方法が確立していない技術に頼ることを想定としている点も不透明で不安で感じました。</p> <p>121カ国が2050カーボンニュートラルを表明しているという点からも、この2050年が環境問題の重要な特異点であり、かつ最後のチャンスである事が改めて理解できたと思います。</p> <p>全体を通して批判的な立場での講義であり、最終回のゲスト講義にして環境問題が想像以上に深刻であるということを実感できた講義だったと思います。最後にこのように現実をしっかりと理解しておくことは、これからさらに環境問題について深く学ぶためにとても大切であり、とても良い機会だったと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>			
学籍番号・氏名	20J1049B 鈴木 七海	学部	経法
<p>今回は「2050カーボンニュートラル、パリ協定は達成できるか」ということについてお話を聞きました。はじめに温暖化の現状と温室効果ガスの排出状況についてお話がありました。温室効果ガスについて今まではCO2だけに注目していて、N2Oも窒素肥料として環境を汚染している事実を知らなかったのが今日知ることができて良かったです。温暖化による一番のリスクに海面上昇があげられていました。何も対策をしなければ沈む国があり、実際の写真をみて、現実にかけていることだと実感しました。今回の講義で改めて温暖化のリスクを学ぶことができました。今までの講義では、日本が環境のために取り組んでいることを主に学んできたので良い面は知っていました。しかし、日本が他の国に比べて遅れていることや批判があることが今回の講義に含まれていて、日本の焦らなければならない現状を再確認しました。</p> <p>エネルギーについて、原子力エネルギーは競争力がなくなっているのに従来の形を維持する、という点など政府はまだ再生可能エネルギー普及のための補助金などを出すことを渋っているようにも思いました。</p> <p>環境問題の解決のためには消費者意識がやはり大切だと感じました。日本は丁寧で消費者を一番に考えるが故に、過重包装や食べきれない量の料理の提供などを行っているように思います。講義内であった紙のみのパッケージのように、環境を犠牲にしている丁寧さを見直すべきです。サービスを提供する側も受け取る側も、環境のためには「ちょうど良い」量を知ることが大切だと思いました。私も何か消費行動をするときには環境のために、ちょうど良い量を一番に考えられるようにしたいです。</p>			

学籍番号・氏名	20J1066B 西出 光里	学部	経法
<p>海面上昇が地球温暖化の最大の被害だという話が興味深かったです。</p> <p>日本は京都議定書の目的を自国だけでは達成できなかったのが排出量枠組みを購入することで目標に到達したと聞きました。これについて質問したいことがあります。</p> <p>平澤さんは、日本は目標を本当に達成したと考えますか？これからも枠組み購入に頼り切りになってしまうといけないので、日本は二酸化炭素排出量枠組み取引を制限するべきだと思いますか？</p> <p>再生可能エネルギーは日本では導入が難しいといえどもまだまだ設備容量があると分かりました。</p> <p>再生可能エネルギーのうちのソーラーパネルについて質問したいことがあります。日本家屋の寿命は30年と聞きました。ソーラーパネルの設置において最大の問題はコストと家屋の寿命なのではないかと考えています。ソーラーパネルに合わせた家屋の改良はどれくらい進んでいるのでしょうか？</p> <p>ドイツでは瓶のリサイクルや野菜などの量り売りがされていると知り、日本がどれくらい過剰包装をしているのかが分かりました。自分がよく購入する弁当や、文具でもプラスチック製の包装がされています。これらの商品は自分にとって必需品なので、現状では包装を理由に商品を選ばません。水についてですが、店でミネラルウォーターを専用のタンクに入れる方式と2リットルペットボトルを何度も購入する方式では、まだペットボトルを購入する方が良いと感じています。現状のプラスチック包装商品とそうでない商品を比べながら日本の過剰包装文化はどうすれば改善されるのかについて考えてみようと思いました。</p>			
学籍番号・氏名	20S6006C 加藤 晃征	学部	理
<p>カーボンニュートラルを実現する上で、バイオマスを使った政策が現実的だと感じました。世界でも大企業がバイオマスの利用に動いていて良いと思いました。しかし、日本では火力発電への融資がとて多く世界と逆の動きをしているのはとても残念でした。再生可能エネルギーを利用する新たな生活スタイルを考えていくことに興味を持ちました。日本がフードマイレージが高く食料廃棄も多いということで、地産地消の動きをもっと活発にしていく必要があると感じました。海外の省エネのための動きがとても大胆で日本も見習っていかないといけないと思いました。</p>			

学籍番号・氏名	20S6015B 諏訪 竜之介	学部	理
<p>今回の講義では、2050年に向けた脱炭素社会への世界の現状や取り組みについてのお話を聞いた。今までは漠然と地球温暖化や気候変動について考えていただけであったが、実際にデータや統計を見て、二酸化炭素排出の増加や気温上昇をリアルに感じる事ができた。特に温暖化に伴う海面上昇の推移と予測では、このまま温室効果ガスの排出を進めた場合、あと数百年後には東京などの首都圏の一部があんなにも海域になってしまうことにとっても驚いた。自分の実家がまさに沈んでしまったところに位置していたので、なおさら危機感を感じた。</p> <p>またパリ協定を軸とし、世界各国の脱炭素社会に向けた温暖化対への取り組みを知ることができた。自分は正直、世界の国々は地球温暖化対策にあまり努めていない、または貢献している国は少ないのではないかという印象を持っていたが、思っていたよりいろんな国が目標を定め、国内での規制などを行っていることを知り、日本も先進国の中の一国としてどんどん取り組みを行ってほしいと感じた。</p> <p>世界規模で脱炭素社会への現状を知り、今まで自分が行ってきたエコバッグの持参や食品ロスの削減などの活動が、より意味のあるものを感じられた。これからも自分にできる取り組みは積極的に行っていきたいと感じた。</p>			
学籍番号・氏名	20S6020J 中井 菜月	学部	理
<p>以前からテレビでワールドニュースなどを見ると、ヨーロッパと日本とでは環境に対する意識に差があるなど感じる事がよくありましたが、こうして色々な資料を見て、改めて日本政府の対応の遅さを感じました。再生エネルギーの利用拡大は今後も進められていくとは思いますが、地理的にも利用できる地域というのは限られていると思うし、これからそれぞれの土地に見合った新しい再生エネルギーが生まれるといいなと思いました。生活の中にある”環境に良くない当たり前”に気づいたり、それを変えたりしていくのはなかなか難しいかもしれないけど、その新たな取り組みが次の”当たり前”になると、たとえ小さなことでも大きなことにつながるような気がしました。</p>			

学籍番号・氏名	20S6024A 藤中 暁	学部	理
<p>今回の講義は今までの講義の中でも聞いたことがある事柄も出てきて、これまでの授業のまとめの講義のようだった。様々なグラフを見て、やはり日本は脱炭素化から遅れている印象があった。しかし、人口やGDPが高いアメリカや中国、インドなども脱炭素化があまり進んでいないところを見ると、人口や生産量が少ないからヨーロッパ諸国は脱炭素化しやすいのではと思い、国のスケールもコンパクトになることも脱炭素化には必要なかもしれないと思った。完全に脱炭素化したいのであれば産業革命以前のような生活を送ればいいのだが、そのようなことは現実的ではないため、どこまで規制し減らすのかというバランスが難しいと思った。講義中の質問でも出したが、現在稼働中のソーラーパネルの廃棄の仕方がまだ模索中であるように、再生可能エネルギーも完璧という訳ではない。また、すべての自動車は電気自動車に変わるならば、電気の消費量が上がるため電気の需要がどんどん高まるだろう。その大量の電気を再生可能エネルギーのみで賄えるのかなどと、今後も解決すべき課題は増えるのではないだろうかと思った。日本は脱炭素化で遅れをとっているが、それはむしろこれから増えていく課題に対して慎重に検証しながら脱炭素化に取り組めるという長所でもある。この長所を利用することで日本は、あらかじめ課題を見据えた方法で脱炭素化に取り組んだり、新しい発電方法を生み出すことで課題そのものを減らしたりと、ただ他の国の背を追いかけるのではなく、画期的な取り組みができると良いと思った。</p>			
学籍番号・氏名	20M0108H 森 恒輝	学部	医
<p>講演ありがとうございました。今回の講演では、現在の二酸化炭素排出量の状況やこれからの課題について詳しく知ることができて良かったです。環境問題についてより一層興味を高めることができました。</p> <p>日本の木材自給率が低いということは初めて知りました。日本は木が豊富にあるのに、それ以上の木材を使っているということでもあるので、これは深刻な問題だと思いました。木の本数が減ると、吸収できる二酸化炭素の量が減ることにもつながってしまうので、この問題は早急に解決しなければならぬということも学ぶことができました。二酸化炭素吸収量を増やすためにDACという機器があることも知りました。しかし、できればそのような機械に頼らずに、木を植えることで二酸化炭素吸収量の問題を解決してほしいなと思いました。</p> <p>さらに、食料の廃棄率が低いこともとても深刻な問題だと思いました。食料の廃棄率がアメリカを上回っていることにはとてもびっくりしました。私が思ったのは、日本でもアメリカのように、レストランなどで食べきれなかった料理をテイクアウトできるようにすれば、食料廃棄量が減ると思いました。</p> <p>また、今回の講演では、諸外国の地球温暖化対策を知ることができました。日本も海外の制度のうち、日本の国土や国民性にあったような制度を一部導入したり、日本に合うように少し変えたりして、地球温暖化対策をもっと進めていくべきだと感じました。</p>			

学籍番号・氏名	20M1113K 梶原 千聖	学部	医
<p>今回の授業を受けて、世界が本当に危機的な状態になっていることを感じた。日本の二酸化炭素排出量に対する有効な対策として、石炭火力発電所の新設を廃止し既存のものも段階的に廃止する、というものがあつたが、日本人は原子力に反対な人も多く、また自然エネルギーでは発電コストの問題や出力が不安定で地形等の条件から設置できる地点も限られている、などの課題が伴い、とても難しい問題であることがよくわかつた。また、1997年に京都議定書で先進国に対して対策が義務づけられ、ヨーロッパなどは実際に削減に貢献しているのにもかかわらず、日本はその当時から排出量が増加しており、気候変動による災害が増えてきた近年から危機意識を持ち始めたように私は感じて、何事にも早く対策を実行していくことが大切であることを学ぶことが出来た。今発展し続けている国にとっては温室効果ガス削減が厳しい部分も大いに考えられるし、先進国に対してなぜ自分たちだけと思う部分も考えられ、このような発展途上国に対する対処の問題もあると考えると気候に関することだけでも課題が山積みだということがわかつた。また、自動販売機の数が日本はとても多くあり必要の無い電力を使っているということを聞いて、まだまだ日本には細かい部分を見つめ直していけば改善点があるのだろうと思った。排出量削減には国や企業だけではなく自分たち1人1人が意識を持って変えていかなければならない問題なので、今できることに取り組んでいければなと思う。</p>			
学籍番号・氏名	20M1405H 栗田 藍	学部	医
<p>今回の講義では地球温暖化と温室効果ガスの排出に関する現状、それらに対する日本や世界各国における取り組み、そして私たち一人一人ができることなどたくさんの内容を詳しく知ることができました。特に日本に住んでいる以上環境対策は日本のことしか知らなかつたので、今回の講義を通して世界各国の取り組みについて知ることができとても勉強になりました。また世界各国の取り組みを知つたことで日本の環境対策の遅さを知ることもできました。今回の講義の中でも度々ふれられていた太陽光発電に関して先日気になるニュースを耳にしました。それは九州電力で太陽光発電の供給量と需要のバランスが保てなくなることを防ぐために出力制限が行われているという内容のものでした。せっかく太陽光発電が普及しつつあつても、それを生かしてきれていない現状が日本にはあることを知り、2050カーボンニュートラルを達成するためにも再生可能エネルギーの普及はもちろん、それをうまく使うシステムの確立をしていく必要があるのだなと思つました。今回の講義の中で私たち一人一人ができることを場面ごとに細かく提示してくださり、私たち学生でも簡単に取り組めることも多く、取り組んでいこうと思つました。ペットボトル飲料を買いがちだったのでまずはマイボトル持参から始めていきたいと思つます。そして自分自身が意識を変えていくのはもちろん、家族や友人らを巻き込んで意識を変え取り組んでいきたいと思つます。</p>			

学籍番号・氏名	20T1030H 河野 雄生	学部	工
<p>正直自分は地球温暖化によって2, 3°C程度温度が上昇したところでそんなに大きな影響はないのではないかと思っていたこともあったが、1.5°C上昇と2°C上昇でも大きな差があり、気温の上昇による影響は大きなものであるということを改めて理解することができた。だから、この削減目標では達成したとしても、約3.5°Cの気温上昇時の排出量に相当するとあるようにこのまま進めても、気温が大きく上昇してしまい、人間だけでなく、地球上の生物にも大きな影響を与えることになってしまうと思う。近年、自然災害が増えたり、台風が強くなったりしているのを感じるが、これも地球温暖化の可能性があると考えると3.5°C上昇してしまうと、絶滅してしまう生物も多くなってしまうと思う。だから、今まで以上に世界中が協力して温暖化対策を行っていく必要があると思った。様々な企業で様々な脱炭素のに向けての取り組みがあり、また化石燃料ダイベストメントの話もあったように、これからは化石燃料を使用した事業を行う企業よりも環境により良い事業を行う企業の方が投資されるのが当たり前になってくるのではないかと思うので、これからさらに多くの企業が多くの新しい取り組みを行っていくのではないかと思った。</p>			
学籍番号・氏名	20T1032D 小林 祐作	学部	工
<p>今回の講義を聴いて世界の温室効果ガスの排出量やそれに伴う地球温暖化の影響などを聞いて本当に真剣に向き合っていかなければいけないものだと感じました。日本も年々温室効果ガスの排出量は減ってきているものエネルギーシフトによる根本的な解決にはなっていないと講演の中にありました。これからのエネルギー問題を根本的に見直して改善していくことや温室効果ガスを出さないことが喫緊の課題なんだと感じました。それらを行わなければ海面上昇などの影響が深刻になります。これから世界の人口が増えていく中で今ある地球を守っていくことは大切なことだと思いました。またそれらの取り組みには全ての企業や銀行などの取り組みも重要になると初めて知りました。銀行が化石燃料代ベストメントを積極的に実行していくことで企業はより環境問題に取り組み、国だけでなく世界の企業が環境問題に取り組んでいくことでより速くエネルギー転換などの世界の新しい環境へのあり方が確立されていくと感じました。そして僕たちは企業の環境への取り組みに対して積極的にものを買って、消費者としてより正しい選択をしていくことだと感じました。暮らしの中にマイバッグや省エネなどの取り組みを当たり前にして少しでも環境問題に取り組んでいきたいです。</p>			

学籍番号・氏名	20T1046D 杉谷 広晶	学部	工
<p>今までの講義で軽くしか触れられていなかった地球温暖化についてとても詳しい説明をしていただき、世界・日本の現状とこれからの世界・日本に求められていることがよく理解できました。今回の講義内で強く印象に残ったのは、石炭火力発電と木材・食料の自給率についてです。世界から日本がいまだに石炭火力発電に依存していることが批判されていますが、日本には多くの先進国と異なりエネルギー資源に乏しく、他国とのパイプラインや送電線も持ちません。加えて世界有数の地震大国であり、リスクを考慮すると原子力発電も適しているとは言えません。再生可能エネルギーの多くは電力供給量が不安定であり、管理が容易で安定的な電力供給設備を持たざるを得ないところは明白です。地理的特徴により石炭火力発電に頼らざるを得ない現状にあるにも関わらず、対案もなく石炭火力発電の全廃を求めるのは無責任ではないかと感じました。</p> <p>また、日本の木材・食料の自給率が低いのは安価な外国産にシェアを奪われていることが問題であり、エネルギー資源の自給率の低さと異なり、解決可能な問題であると考えます。地産地消などの消費者意識に呼びかける対策も大切ですが、それだけで自給率が大幅に改善するとは思えず、関税の引き上げなど具体的な対策が必要であると思います。</p>			
学籍番号・氏名	20T1053G 竹村 奏	学部	工
<p>今回の講義で一番印象に残った部分は、家庭からの二酸化炭素の排出量の部分です。この講義を受ける前までは、一般家庭で消費する二酸化炭素の量は、車による排出ガスつまりガソリンが多くを占めているのではないかと考えていました。しかし結果を見てみると、ガソリンは2割程度しか占めておらず、一番排出していたのは電気でした。では具体的には、どれほど排出しているのか気になったので調べてみました。人間1人が一日に排出する二酸化炭素の量は、約6キロとされており、正直この数字は高いなと感じました。そこで1人約1キロ削減するには、どのようにすればよいのか。ここで普段の家庭での電気器具の使用の見直しが大事になってきます。例えば、冷蔵庫では開けている時間をなるべく抑えることや、ガス給湯器などでは食器を洗う時は設定温度を少し下げるなど様々な工夫ができます。今回調べてみて分かったことは、確かに人間は1日あたり多くの二酸化炭素を排出しているが、電気などからの排出は、私達一人一人の努力や意識の変化で確実に減らせるということも分かりました。</p> <p>最後に質問なのですが、今現代の段階で例えば10年後や20年後には家庭からの二酸化炭素の排出量はどのようになっていると思いますか？</p>			

学籍番号・氏名	20T1061H 所 悟	学部	工
<p>私は今回のお話を聞いて、地球温暖化というのは着実に進行しているのだなということが、改めてわかった。特にお話された中でも驚いたのは、海面の高さが大幅に上がる可能性があるというお話である。正直、海面が上昇しており、沈む国なども出てきているなどのことは、ニュースなどでも流れていたため知っていたが、沈むといってもその国の海拔が低いのではないかなどと考えていた。しかし、実際に話を聞いていると、北極や南極グリーンランドなどの氷は解けており、これから対策したとしても59cmも海水面が上昇するというのはとても大きい数字だなと感じた。また、もし1メートル海水面が上昇した場合、日本の海岸の90%が失われてしまうということも説明しており、そうなってしまえば日本でも沈んでしまう町などが出てきてしまうため、大変なことだなと感じた。さらに、グリーンランドの氷が全て溶けてしまった場合は、7メートルも海水面が上昇すると聞き、そんなに海水面が上昇してしまえば、死んでしまう人なども出てきてしまうため、大変なことだなと感じた。正直、今の技術だと人間は陸地がないと生きていけないため、これから海水が上昇するという問題は、人類存続の危機ということになりかねないので、早急に対策をとることが必要なんだということが改めて実感できた。</p>			
学籍番号・氏名	20T1065A 中村 太紀	学部	工
<p>今回の講義を通じて地球温暖化の危機をより感じるようになった。地球温暖化による影響として、干ばつ、南の島が沈む、北極・南極の氷が溶ける、自然災害が考えられる。そしてグリーンランドの氷が全て溶けた場合、海面が7m上昇し、日本の一部が水没してしまうと知り、恐ろしいと感じた。その地球温暖化を和らげるため、パリ協定の中期目標が定められている。具体的な気温上昇緩和の目標として1.5°Cという数字が主流になっていることを初めて知った。一方日本の取り組みとしては原発に依存しない再生可能エネルギーの導入が一つの課題である。その背景には福島原発事故による放射性廃棄物の処分に行き詰っている現実がある。また日本の温室効果ガスを2050年までに0にするためには2030年までの目標である26%削減では遠く及ばないと知り、来年のCOP26までに再提出すべきという意見に同館であった。日本では再生可能エネルギーの利用が拡大しているが、その中でグリーンエネルギーといものを初めて知った。太陽熱温水器はコスパもよいため流通が進むことを期待したい。そのような取り組みの一方プラスチック危機や食料廃棄物の問題があるため環境問題解決には課題が山積であるとわかった。最後に排出に関する罪悪感が希薄であるという資料があったが、申し訳ないが確かにそのとおりであると感じたため、今後意識を変えていこうと思った。</p>			

学籍番号・氏名	20T1084G 丸山 航平	学部	工
<p>今回の授業では環境について世界の取り組みについて教えていただきありがとうございました。私はこれに関する話題に興味があり、とても楽しく拝見させていただきました。</p> <p>日本は2050年までに二酸化炭素の排出を実質ゼロにすることを宣言したが、このままでは達成が難しいと思い、一人一人が意識して節電や食べ残しを減らすことなどに取り組むことをしなければ、達成は不可能だと思います。日本はEUをはじめとした先進国と比べて発電のために化石燃料を利用して、世界中から批判されてしまいました。これからはほとんどの発電量を再生可能エネルギーで賄わなければならないが、いまだにたくさんの問題があります。それは再生可能エネルギーをベースロード電源にするにあたって、再生可能エネルギーが天候などによって左右し不安定になってしまい、需要に合わせて発電できないということです。また、供給電力が不安定なので配電線を通る電気の周波数や電圧が一定にすることが難しくなってしまいます。それにより、家庭の電化製品が故障してしまう恐れが出てきてしまいます。平澤さんはこの問題についてどのようにお考えになっていますか。お答えしていただければ幸いです。</p> <p>また日本は資源を無駄使いしすぎていると感じます。大量の食べ残しを廃棄することや、世界第三位の森林国でありながら建物に使う木材を輸入し、たくさんの石油を使っていることなど削ることができる資源はたくさんあると思います。資源が不足している日本で今一度、資源が有限であるということを考えてほしいです。</p>			
学籍番号・氏名	20T3007D 稲岡 尚斗	学部	工
<p>今回の講義を受けて、日本の気候変動に対する取り組みの意識の低さを改めて実感した。フードマイレージの値の高さや石炭火力発電所の利用維持など、あまりにも数多くの課題が現状存在している。こうした課題の多さの原因の一つとして、国民一人一人の気候変動に対する意識が低いという理由があると思う。他の先進国を見てみると、環境問題への国家の対応に対して不満が生じると、あらゆる場所で国民による抗議運動が活発になる傾向がある。その一方で、日本では不満が生じても、実際に抗議活動を起こす人は少なく、消極的な姿勢がよく見られる。国民が抗議活動を起こすかもしれないという状況を作ることは、政府にとっても緊張感を持つことにつながり、国民の反感を買わないように努めようという気になるかもしれないので、国民が声を上げるということは、それだけで取り組みへの意識が高くなると思う。国民が声を上げやすいような環境を作ることが、政府の取り組みに緊張を与えると思うので、あらゆる手段で簡単に政府に意見を提示できるようなシステムを導入していくべきであると思う。抗議活動を増やすことが大事であるというわけではないが、国民一人一人が問題に対して考えを持つようにしていくことが大事であると思う。</p> <p>質問</p> <p>講義資料によるとブータンで温室効果ガスの排出実質ゼロの目標がすでに達成されているが、ブータンでこれだけ早く目標がすでに達成された要因というのは、主にどういったものなのでしょうか。</p>			

学籍番号・氏名	20T3026A 篠原 諒	学部	工
<p>私が今回の講演で最も印象に残った事は、日本の環境対策の遅れの深刻さです。そして、これには主に三つの原因があると思います。一つ目に、やはり石炭火力発電の問題です。日本がこれほどまでに、石炭火力発電に依存している理由として、原発事故による影響や、資源が乏しい国であることがあり、多少は仕方がないことだと思っていましたが、講義を聞く中で、日本が世界中から散々に批判されている現状を改めて知り、何としてもこの現状を変えていかなければならないのだと思いました。二つ目に、日本が地震大国であることです。講義内で紹介された、CCS (Carbon Capture and Storage)やDAC (Direct Air Capture)といった、排出された二酸化炭素を回収し、資源として活用することも可能にする技術は、環境対策と経済活動を両立させ、持続可能な社会のためにも不可欠な技術だと思いました。しかし、日本は地震が多いために、このような装置を設置することはリスクがあると聞き、大変残念に思いました。その代替策として、途上国に日本が炭素回収のための設備投資をすることで、日本国内で炭素回収をしたこととみなす、というものがありました。これは大変面白い考えだと思いましたが、どうしても受動的な考えに思えてしまいます。日本が温室効果ガス削減を目指すためには、国を挙げて、地震大国においても安全に使える炭素回収技術を開発するといった能動的な姿勢が求められると思います。そして3つ目に、日本社会の便利さゆえの環境負荷です。日本の自動販売機の数は世界的に見てもかなり多いということは知っていましたが、それがCO₂排出に大きく関わる問題であるとは考えてきませんでした。これまでの私の様に、環境負荷のことに気づかずに、自動販売機の便利さにはしか目がいかない人はまだまだ多いのではないかと思いますし、日本社会にはこのほかにも、私達の生活を便利にしている反面、環境に負荷を与えているものが多く存在するのではないかと思います。この様に市民一人ひとりがCO₂排出に深く関わっている現実があるからこそ、一人ひとりの行動が大事になってくるのだと思いました。今回のご講演では、温暖化対策の世界的な潮流から、私達一人ひとりが取り組めることまでを幅広く、グローバルに教えていただき、大変勉強になりました。今後、個人的に平澤さんのNPOの活動を調べ、自分の生活に活かしていきたいと思います。この度は、大変貴重なお話をしてくださりありがとうございました。</p>			

学籍番号・氏名	20T3056B 山口 宗一郎	学部	工
<p>先日はお忙しい中、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。よく出てくる単位に始まり、7つの温室効果ガスについて、世界の温暖化政策の歴史、パリ協定の解釈、各国の現状と取り組み・目標・可能性、企業の取り組み、最先端の再生可能エネルギー例、日本のフードマイレージ、世界の省エネ・省資源のまちづくり、NPOの活動など様々な幅広いことを分かりやすく、深くお話しいただき、時には聞いたことのないものもあって大変勉強になりました。今回の講義でお話しいただき、学んだ内容の中で特に興味深かったものについて記そうと思います。</p> <p>まず、EUの2050年のカーボンニュートラルについてで、7つの基本政策がありましたがその中でも7つ目の「炭素回収貯留技術（CCS「Carbon dioxide Capture and Storage」）による余剰排出対策」とある排出されたCO₂を、ほかの気体から分離して集め、地中深くに貯留・圧入する技術というのに驚きましたし、それが比較的大きな取り組みの一つに入っているというのは僕の中で想定外でした。次に、再生可能エネルギーの利用拡大ということで、比較的変換効率の高い太陽熱温水器を家庭のエネルギー消費の用途の2/3を占めている熱利用に使用するのは、環境にいいと思うしその上、コストもいいと聞いてなんて画期的なものだと感銘を受けました。また、日本の食文化関連に関してで、自動販売機について考えたことはなかったですし、食べ物の廃棄、ダントツのフードマイレージから食べ物に関しての豊かさの背景にこのような現状があることを再認識しましたし、一部の問題に関して地産地消の重要性を感じました。最後に、欧州等のまちづくりに関して、野菜果物に飲み物の販売方法はもちろん、パリ中心部の夕暮れの景色、一般車乗り入れ禁止のスイスのグリンデルワルドの村、スマートタウンなど様々な取り組みがなされており、進んでいるなと感じましたし、日本もどんどんそういったまちづくりを行っていく必要があると感じました。</p> <p>今回の講義を聴いて、自分ができることを毎日継続してやっていく必要があるし、それが経済の仕組みにも影響を与えていくのだと感じました。学ぶだけでなく実践していきたいと思いました。</p>			

環境マインド実践基礎論 学生感想文

2020年12月9日「-2050 カーボンニュートラル～世界は変わる～ パリ協定は達成できるか？」

学籍番号・氏名	20T3058J 山田 皓稀	学部	工
<p>日本は2014年以降6年連続で温室効果ガスの排出量の削減に成功している。この事実に自分は日本の環境意識の向上が見られているとすごくうれしく思った。ところが1900年に制定された京都議定書の基準と比較すると削減目標に届いていないのが現状であるという。日本は電源の低炭素化やエネルギー消費に伴う二酸化炭素排出量が減少したことが考えられている。しかしこれは省エネ対策ではあるが、エネルギーシフトを伴う革新的な取り組みではなく、解決には直結しない。そうこうしているうちに異常気象による自然災害の頻度、損失額が増加し、気候変動による生態系の変化、それに伴う人間の生活への悪影響が問題視されている。海面上昇によって海岸が浸食されると人間の生活範囲が狭まり、土地の取り合いが始まるのではないかと感じ始めた。すると生活環境の悪化だけでなく、紛争にも繋がってくるためすごく危機感を感じた。</p> <p>世界の価値観を変えたと言われるパリ協定が制定されてから、世界各国が改革に乗り出している中、日本は必ずしも先進的とはいええない立ち位置にある。世界各地には交通量の調整する仕組みの設定、自動車の販売規制、町づくりを工夫して目標の改善に取り組んでいる例が紹介された。特に興味を持ったのは都市との絡みである。都市緑化、自然との調和、環境定期券の設置等の成功例には日本にも組み込めるものがあるように感じた。野菜のはかり売り、文具のプラスチックを省くことには思い切りさがあったとよかった。逆にそこまでしなければ目標を達成できない時代になってきている、これまでの無駄がかなり大きなものであったということを感じた。あると便利だが、なくても大丈夫なものは今後、どんどん省いていってほしい。自然の中に都市を生み出す構想がされるようになれば地方の活性化にも繋がると思う。環境問題の解決が地方の問題の解決に繋がることは少なくないと思った。2050年を遠いと感じる人もいれば少ないと感じる人もいる。今年一年の短さを受けて、残り30年もないこの期間はすごく短く、急ぐ必要があると強く思った。</p> <p>質問</p> <p>以前に南極の氷の上にシートを貼って氷が太陽光の熱で溶けることを防ぐ取り組みが紹介されていた。しかしこの取り組みは、シートの生産による二酸化炭素排出量を考えると、環境に良いとは考えづらいという見解がされていた。新設備を導入して長期的な省エネを見込むものと、直近の資源消費、二酸化炭素の排出を考えることでは、環境への負荷のウエイトはどれだけ変わってくるのか気になった。(講義中にお話しされていたらすみません)</p>			
学籍番号・氏名	20T5009A 岡下 祥万	学部	工
<p>今回の講義では、資源・エネルギーについて多くの情報を細かく教えていただきました。その中で、私が一番気になったのは日本の自然エネルギー発電量の少なさです。2019年の日本では発電量に占める自然エネルギー等の割合は、わずか20%足らずです。この事実がもたらす危機として、電気自動車のメリットを小さくすることが挙げられると思います。最近では、電気自動車の普及が流行しています。しかし、日本のような発電を火力に大きく依存している国では、電気を生み出すのに二酸化炭素を排出するので、電気自動車を走らせる段階で二酸化炭素を出さないようにしてもトータルのサイクルで見ればガソリンエンジン車とあまり変わりません。そこで、私は日本で実施すべきことは他国の行うようなガソリン車、ディーゼル車の販売禁止ではなく、自然エネルギー発電量を増やすことだと思いました。そして肝心の自然エネルギー発電量を増やす方法は、講義内で平澤さんがおっしゃられたように、人々の考えを「価格志向」から「環境志向」に変換させて各家庭にソーラーパネルを普及させる意識を持たせることや、日本が多く所有する海を利用した海上風力発電や海上ソーラーパネルが良いのではないのかと私は考えました。ほかにも自然エネルギーを効率よくかつ大量に使う方法はあると思います。そのことを念頭に置きながら、これからのクラスを深めていきたいと思いました。</p>			

学籍番号・氏名	20A1001J 青嶋 里央夢	学部	農
<p>私が今回の講義において一番印象に残っていることは、現在問題となっているプラスチックごみの減らす具体例です。最近ではレジ袋が有料になったことは記憶に新しく、私自身も袋を持ち歩くようにはなったので意識的には変わったのだと思います。しかし、トレーや商品自体を包んでいる袋、ペットボトルやその他の容器などまだまだ私たちの身近な物にはほとんどプラスチックが使われていると思います。だから、レジ袋が有料になってもそんなに大きな変化を実感しなかったのかも知れません。しかし、今回の講義ではこれらプラスチックごみを減らすための具体的な取り組みをあげて説明してくださっていました。文具のカバーをなくすこと、再利用できる瓶での販売、トレーや包みを使わないために量り売りをするなど様々な工夫を知りました。確かに大変ではあると思いますが、量り売りにして自分で容器を持ってくれば大幅に減らせるかも知れないと思いました。ごみを出しているのはほとんど家庭内で発生したごみなので、企業が取り組むだけでなく消費者である私たちの協力は必須だと思います。今私は、環境について勉強し、考えているからこそもっと気をつけようと思うことが多いですが、それ以外の人にも意識的にも変えてもらうためのもっと認知された政策があればいいなと思いました。</p>			
学籍番号・氏名	20A2007C 位田 宗一郎	学部	農
<p>今回はパリ協定を中心とする環境問題への対策に関する講義だった。日本における環境問題への対策の不十分さをよく理解できた。グラフや数字を多く取り入れてくださっていたので具体的にイメージすることが出来た。中でも地球温暖化の影響で漁獲可能な魚の量が24%減少するというデータと温室効果ガス排出トップ10の国だけで世界の排出量の7割に相当するというデータは印象に残った。また、最もGHGの排出量の多かった2013年からは減少しているが、1990年比では、6%も減少しておらず京都議定書の基準にも達していないことは何度聞いても危機感を抱く。</p> <p>世界の環境対策として、ガソリン車やハイブリッド車の販売禁止は日本でも必要な事であると思った。日本でも電気自動車は開発され実用化されているものの、価格は依然として高く電気スタンドの設置や再生可能エネルギーによる家庭での充電施設の設置の補助なども積極的に進んでおらず、まだ販売禁止や規制は出来ないと思う。欧州各国のように具体的な期限を決めて、規制を始めるべきだと思った。</p> <p>日本の温暖抑制の姿勢のところの「原発事故の苦い経験だけでなく放射性廃棄物の処分に行き詰まっている現実を直視し、原発に依存しない将来像を明示すべき。」というコメントには賛同できる。日本は環境問題に対する姿勢としてEUなどから大きく遅れていることを認めず対策を変えようとしていないように感じる。太陽熱温水機など家庭でも取り入れやすい再生可能エネルギーをもっと普及させる必要があり、市民も技術の発展に注目する必要があると思った。</p>			

学籍番号・氏名	20A2033B 山下 明築	学部	農
<p>今回の講義ではパリ協定の詳細と各国のパリ協定に向けた取り組みについて知ることが出来た。講義の中で特に印象的であったことは日本は森林大国であるのにも関わらず3分の2を輸入にたよっておりフードマイレージ曰くウッドマイレージ状態であるということである。私は、日本は日本にある豊かな資源を有効に活用で出来ていないと感じた。日本で供給できるものを再認識すること、日本にある資源をなるべく使用しようとする努力をする、地産地消に似た取り組みを行うべきであると感じた。また、プラスチックゴミ問題についても考えさせられる部分がとても多かった。文房具・食品など売買されている多くの物がプラスチック製のビニール等で包装されていることを講義を通して気づかされた。このような身近で当たり前の存在として捉えられているプラスチックをまずはこのようなプラスチックの包装から紙製の包装に変えるなどの工夫も必要であると思った。しかし、今飲食店などでプラスチックのストローが紙製の変ったことで、その紙製のストローの機能性に不快感を感じている人が多くいるように感じる。身の回りのプラスチック製品がこれから様々な原料の製品に変化していくなかで、多くの人々がその変化に対応することができるような製品を開発することも重要であると感じた。</p>			
学籍番号・氏名	20A3007J 大森 翔子	学部	農
<p>私は今回の講義を受けて、環境問題について学び、考えていくためには、現在の地球環境の問題についてのことをきちんと学び、しっかりとした自分の意見や考えを持つことがとても重要であると思いました。講義ではいろいろな環境問題についての内容が講師の方の意見や考え方のもと紹介されましたが、私は問題に対してしっかりとした自分の意見を持っていなかったため、紹介から学ぶだけの浅い学びしかできませんでした。これはこの貴重な講義を無駄にしてしまっている行動ではないかと考えます。しっかりとした自分の意見を持っていたら、自分の意見と講義を比較し、そこから考えて発展していくような深い学びができると思うからです。だから、今回の講義や今までの内容を復習したりしてしっかりとした自分の意見をつくっていきたいと思います。また、自分の意見を持った行動は人々にも影響を与えることができると思います。講義のなかで「一人一人ができることから始め、継続して取り組みを深化させよう」という言葉がありましたが、この一人一人がしっかりとした自分の意見を持っているかはとても重要であると思います。自分の意見を持っていることで行動を継続できるし、その強い意志は周りにもいい影響を与えることができると考えたからです。自分の意見を大切にし、これからも学んでいきたいと思っています。</p>			

学籍番号・氏名	20A3020F 佐々木 優	学部	農
<p>前回までの講義で信州を中心とした様々な環境への取り組みを学んできたが、一方、政府のトップが意欲的に環境問題に取り組んでいるとはあまり実感したことがない。今回の講義で世界と日本の、地球温暖化対策の意欲の差を実感した。まず、第一に温暖化を抑制するにあたって、自然エネルギーを主流にすることは外せないと改めて思った。石炭火力発電や地震の多い国である日本に合わない原子力発電に未だに頼っていることについては何年もその議論を聞いているので、世界と比較するまでもなく全て遅いように感じる。今の環境政策も世界に後押しされているだけで、もし世界に何も言われないのであればこの先日本は化石燃料に頼り続けるのではないかと思った。しかし、再生可能エネルギー利用の発電法にも日本ならではの大きなデメリットをそれぞれ抱えていることは事実であると思うので、日本独自の最善の解決方法を日本全体で考えなければならないと思った。そのためにも、また一人一人が環境に配慮した選択をするためにも、子供への環境教育や国民に正しい環境の知識を知ってもらい、関心を高めてもらう機会作りが一番重要であると考えます。私の実感としてはこの講義を受講する私を含め、もともと環境問題に対して興味がある人は日本では未だに少ないように感じる。最近それを実感したのは海洋プラスチック問題の解決や低炭素化に向けたレジ袋の廃止が施行された時である。「廃止しても実は何も意味がない」「不便で困る」といった意見は多く聞いたが、これを機に環境問題を見直そうとした意見はあまり聞かなかった。私の知人には「環境問題の解決は人間の自己満足だ」という人もいる。「環境問題の解決のためには少し不便になってもいい」と感じる人は必ずしも多くない印象であった。しかし、そのような考えをシフトしていかなくてはならない時代だと思うので、事の深刻さを国民全体に伝えていくことが日本を環境対策に遅れない国にする方法であると思う。</p>			
学籍番号・氏名	20A3026E 竹田 愛美	学部	農
<p>今回の講義では持続可能な社会を創るというテーマで平澤さんに講義していただいた。平澤さんの地球環境に関するあらゆる問題についての知識とそのデータ量の多さに圧倒された。</p> <p>今回の講義で一番印象に残ったのは海面上昇についてであった。地球温暖化による最大のリスクというのが海面上昇だというのは知らなかった。温暖化による様々な環境への影響は危惧されているが、どうして海面上昇が一番のリスクと考えられているのかは疑問に感じた。しかしこのような疑問が湧くというのは環境問題への意識の低さの表れなのかもしれない。講義資料にあったようにキリバスやモルティブ、ツバルなど海面上昇の被害を既に受けている国も存在する中、特に日本では海面上昇があまり重要視されていないように感じる。日本国内ではまだ海面上昇による被害があまり見られないため、意識が低いなのかもしれない。もっと環境問題に日頃から目を向けなければならないと痛感した。</p> <p>質問としては、日本での再生可能エネルギーの使用量が低い理由の1つとして、再生可能エネルギーにも様々な問題が存在することがあげられると私は考えている。例えば風力発電は電力の供給が不安定であることや鳥類との衝突、騒音や低音波による健康被害等が問題としてあげられる。このような問題が存在する中、今後どのように工夫をすれば日本でも再生可能エネルギーを浸透させられると考えているか、平澤さんの意見を伺いたい。</p> <p>改めて、今回詳しく講義をしてくださった平澤さんに感謝したい。ありがとうございました。</p>			

学籍番号・氏名	20A3033H 新居田 薫	学部	農
<p>今回の講義ではゼロカーボンなどのお話が出ましたが、自分がこれまでに聞いたことがあった国よりも多くの国がゼロカーボンの目標を掲げていることを知ることができました。しかし、トランプ大統領の時のように先進国などの主要国が足並みをそろえなければその目標を達成することが難しいし、他の国の参考にもなれないと思います。後の世界的なエネルギー源などの変換に向けて今から発展国から特に国民ぐるみで活動していかななくてはいけないと思います。また、水力発電などの再生可能エネルギーのコストが低くなっている今では原子力発電の需要が低くなっているということに驚きました。私は今でも原子力発電が効率もコストも他の発電法よりも優れていると思っていました。知識の食い違いには気をつけようと思いました。また、温室効果ガスの削減のためには一人一人が使う電力を減らすこともとても大切なことです。以前の講義で簡単にできる節電方法や、家を建てる時の留意ポイントを教えていただいたので、そのような情報発信を国民の目に入るように努力しなければならないと思います。それはメディアの活動に期待するだけでなく、環境教育にも力を入れていく必要があると思います。また、家の保温性能についてある程度の義務をもうけていく必要があると思います。</p>			
学籍番号・氏名	20A3035D 塗矢 大晃	学部	農
<p>世界全体として技術的発展をしている中、その反面環境問題、主に地球温暖化が顕在している。現在の環境によく目を向けどのような問題が起こっているのか、また、これからどのような問題が起こりうるのか、それらをよく理解しつつ、パリ協定に基づいて様々な対策が練られていることを今回の講義で学びました。なかでも、カーボンニュートラルというものは今まで聞いたことがなかったのでとても気になりました。そもそもカーボンニュートラルとは、環境化学の用語の一つであり、何かを生産したり、一連の人為的活動を行った際に、排出される二酸化炭素と吸収される二酸化炭素が同じ量である、という概念であると知りました。近年の動きとしては、カーボンニュートラルに近い植物由来のバイオマスエタノールなどが使われたり、持続可能性を考慮したうえで薪・枯れ草・木質ペレットなど植物由来燃料の利用が行われたり、また廃棄後に焼却されて二酸化炭素を排出する一方で吸収はほとんどない石油由来のプラスチックの代替として、トウモロコシなどを原料とするバイオプラスチックが製造されているなど色々なことが行われていると知りました。これからの環境問題対策として持続可能ということは、大きな意義を持つと今まで以上に感じました。</p>			

学籍番号・氏名	20A3040A 藤原 怜生	学部	農
<p>今回の講義を受け、日本がどれほどの量の化石に燃料にエネルギーを依存しているのかを再確認することが出来た。また特に、日本の食糧管理の課題はとて大きいように感じた。私自身、食料廃棄率においてアメリカなどの大規模な農場や生産体系を持つ国よりも高い割合の国はないだろうと考えており、ある程度食料廃棄が多い国として認識していた日本が最も廃棄率の高い国だという事実は衝撃的なものだった。日本の食料廃棄の半分が家庭から出たものだという事だが、消費・賞味期限という一つの指標が大きな要因だと考えた。また、食材を残さないこともだが、食物の安全性に過敏になりすぎること大量廃棄につながりかねないと感じた。世界と日本の都市部の景観を比較した写真を見て感じたことがある。それは、日本は都市部での開発と農村部、山間部での開発に差が生まれすぎていることだ。国土のほとんどが森林の日本においては仕方のないことなのかもしれないが、都市開発ばかりが行われることで極端な開発となっているのではないかと感じた。人の流れ、過密を都市と農村・山間部の適度な開発でコントロール出来たら住みよい環境が作れるのではないかと感じた。</p>			
学籍番号・氏名	20A3046K 三宅 拓実	学部	農
<p>かつてから地産地消の良さが紹介されて、今回の講義でも言われていたことだが、環境のことで考えると、物資の輸送が遠ければ遠いほど、その分、多くのエネルギーを使うため、輸送エネルギー減少させることの出来る地産地消の良さを感じた。また、地産地消が行うことにより、食物の場合は新鮮さを保つために用いられるエネルギーが減るほか、輸送や保存にかかる人材費や電気代などのコストを下げることが出来る。さらに、消費者は食材などを新鮮に、安価に購入することが出来るという点でも地産地消はすばらしいと改めて思った。</p> <p>最近では、講義でも紹介されていたように、日本も2050年までにはカーボンニュートラルを目標とする考えがでており、これからのさらなる電気自動車社会の実現へ繋がっていくと思われる。一方で、その電気自動車の課題として、走ることが出来る時間と同程度の時間をかけて充電しなければならないほかに、ガソリン車の最大航続距離と比べると、電気自動車は3分の1ほどになってしまう。また、未だバッテリーの材料費が高いという問題や、技術的にも高価になってしまい、佐藤君が行っていたように、いかに消費者に環境問題を理解してもらい、環境への負担が少ない電気自動車の購入、乗り換えを行ってもらえるかがこんごの課題だと感じた。</p>			

学籍番号・氏名	20A4012A 川浦 康輔	学部	農
<p>今回の講義全体で感じたことは日本の環境対策の遅れである。恥ずかしながら、今まで日本は環境対策の面において他国に比べて進んでいるとは言えなくても、遅れているとは考えていなかった。そのため、今回の講義を受講して非常にショックを受けた。</p> <p>中でも特にショックを受けたのは、電力問題についてだ。数ヶ月前に菅総理が2050年までにCO2の排出量を実質ゼロにするという表明をしたというのに、2030年までの計画とはいえ電力供給の4分の1を石炭火力発電に依存するというのは、先進国と言われる国の姿勢としてありえないことのように感じる。化石賞なんていう不名誉な賞を実質トップで贈られてしまうのも納得である。二酸化炭素排出の問題は、世界全体が足並みをそろえて取り組まない限り決して解決しない問題であり、日本は今までに無い規模での改革が必要であると考えます。</p> <p>火力発電のような大きな問題も解決する必要があるが、ドイツやスイスのような街の景観や信号の無い交差点など、自治体クラスでできるようなことも進めていく必要があるだろう。東京などの大都市はしばしばコンクリートジャングルと呼ばれるが、そんなことを言わせないような都市を築いていく姿勢が、これからの街作りにおいて重要であるように感じる。</p> <p>しかし、結局のところ一番重要なのは私たち消費者の行動であり、社会を構成している一人一人が環境問題にもっと危機感を持つことが必要である。そのためにも、省エネを心がけた生活を積極的に行っていこうと考えた。</p>			
学籍番号・氏名	20A4015E 木村 温	学部	農
<p>これまでの講義や本、資料を読んできた中で、地球温暖化について曖昧だった点が、今回の講義を通して、以前よりも理解が深まりました。温室効果ガスの種類については調べたことがなく二酸化炭素、メタン、水蒸気しか知りませんでした。他にも初めて聞くような化学物質もあり、多くの物質が地球温暖化に関与していることが分かりました。ウシのゲップにはメタンが含まれていると言いますが、二酸化炭素よりも温室効果の作用が強いと知り、ウシは食料とするために生産しているのだからメタンの排出は仕方ないと考えていましたが、私たちの食料も見直さなければならぬ段階になってきていると思いました。</p> <p>日本が世界の中で環境への取り組みが遅れているということも知りました。日本が二酸化炭素を2050年までに実質ゼロにすると発表したのも、世界各国の環境意識への流れに乗っただけであり、積極的に取り組もうという意識が根付いていなかったのだと感じました。日本では当たり前だと考えられていることが、ヨーロッパなどの国々に目を向けてみると、非常に遅れているのだと実感しました。例えば、日本の自動販売機は至る所にあり、無駄なエネルギーを使っています。日本人のライフスタイルを根本から変えていく必要があると思いました。</p>			

学籍番号・氏名	20A4018K 近藤 梨沙	学部	農
<p>CO₂のく国別、部門別排出量やエネルギーの現状、気候変動の現状とこれからについて理解が深まった。日本は環境問題対策について世界から後れをとっている。政府も、個人も消極的である。自分もそうだ。9月に首相が2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにすると表明したが、積極的な行動であったとは評価できない。世界全体の動き、加えて中国の動きに取り残されないために重い腰を上げたように感じた。ただ、理由は何にせよ、排出を実質ゼロにするという表明をしたということは重要なことである。一方、表明自体にいい気な価値はなく、行動が伴わなければ無価値である。日本がCO₂排出量を減らすためには行政、企業、市民全体の行動の見直しが求められるが、排出割合の大部分を占めるエネルギーをなんとかクリーンなものにしなければならない。エネルギーの転換と省エネの両立が必要である。エネルギーの転換には化石燃料ダイベストメントが有効である。直接投資に関われないとしても、お金を預ける銀行の融資先を調べ、選択することができると知った。省エネと同時に、社会のシステムを見直す必要がある。大量消費、大量廃棄、経済成長・効率優先の社会はCO₂排出量も多く、エネルギーを多く使う（多く使う上に、無駄にする部分も多い。）。ただ、今の日本ではそのような社会から外れるにはある程度の経済力が必要である。</p> <p>という先入観すらも取り払って、自分のライフスタイルを変えていくべきだ。</p> <p>地産地消について、私が取り組んでいることは朝市などで地元の農家さんから直接お野菜や果物を購入するようにしている。顔を見て、話を聞いて食材を手に入れることの重要性に気が付いた。</p> <p>料理方法や保存方法なども教えてくれるので、上手く活用でき、食品ロスも減らすことができる。</p> <p>また、ファストファッションを極力買わないようになった。ファストファッションは安くて、デザインも悪くないので魅力的だが、背景を知ってからはお店にもあまり行かなくなった。</p> <p>銀行については自分はあまり意識できていなかった。口座を持っている銀行の一つに化石燃料へ加担しているところがあったので、すぐに移行すると決めた。</p> <p>貴重なお話ありがとうございました。</p>			

学籍番号・氏名	20A4024D 佐藤 温	学部	農
<p>今日のお話を聞いて、環境問題への対策は国などの機関に任せるだけではなく、消費者意識や消費者の行動選択もかなり重要であるということを改めて実感しました。オール電化であるからといって二酸化炭素の排出量を減らせていると安心するのではなく、その電気がどのような発電方法で作られたものであるのかを確かめる必要があることが分かりました。家庭からの二酸化炭素排出量の内、割合が最も多い電気に対して、国や企業は発電方法のグリーン化を進めることが必要であるとともに、利用者である私たちは、持続可能な発電方法で発電された電気を積極的に選んで使うという、国や企業と消費者の二段構えの環境問題への対策が今後日本の「2050年までに温室効果ガス排出量実質ゼロ」目標を達成するために求められていることであると考えました。また、消費者にクリーンな選択をしてもらうためにも、環境問題について学ぶ機会を多く設けるだけでなく、エコな商品は、エコでない商品よりも安くしたり特典をつけたりするなど、消費者がエコな商品を買やすい、または積極的に選んで買うような環境を作っていくことが重要であると考えました。環境マインドを学び、様々な実態について知っている私にとって、今度は実際に得た知識をもとに行動に移さなくてはならないと思いました。普段の消費行動における選択を見直したり、得た知識を家族や友人などに教え、環境意識を広めたりすることが、今私ができる環境問題対策であると思いました。今日はありがとうございました。</p>			

学籍番号・氏名	20A4027J 関口 颯介	学部	農
<p>日本の地球温暖化対策が諸外国と比べていかに後進的であることが改めて分かった。面積が小さく、山地が国土の約7割の日本では大規模な太陽光発電や風力発電の導入は難しいかもしれないが、地熱発電や小水力発電など日本の地理的特徴を活かしたクリーンエネルギーの導入を進めるべきである。日本は火山活動が活発で、河川も急流であり地熱や小水力に適した環境を備えている。一方で、火山地帯は国立公園に指定されていることが多く、河川の利用も環境への配慮が必要である。生物多様性の保全も温暖化対策と同様に現代の我々が取り組むべき課題の一つである。農村部では木質資源の利用が有効であったが、過疎化と高齢化により薪割りなどの力仕事が困難な場合も考えられる。農村部でもエネルギーを地産地消していくには若い世代の流入が必要だと考えられる。今年猛威を振るっているコロナウイルスによりリモートワークが発達し、働き口が無くてもリモートで働くことで若いひとでも農村部に居住することが可能な社会になってきていると考えられる。講義の中で地球温暖化の現状は集積の結果であり、対策も継続による積み重ねが重要だとあった。恥ずかしながら「自分ひとり頑張っても…」という意識が少しあったので、私も暮らしを見直し取り組んでいきたいと思った。</p>			
学籍番号・氏名	20A4031G 堤 友香	学部	農
<p>今回の講義で考えたことは主に二つある。一つは、日本では食に対する意識をもっと変えなければならないということだった。日本の食品は半分以上が海外からの輸入であるにもかかわらず、輸入量の三分の一を廃棄してしまっている。また、食品の輸送に使われるエネルギー量も他国に比べて大きく、地球温暖化を促進してしまっている。食でのエネルギーの無駄遣いは目に見える形で影響を感じないが、地球温暖化などに間接的に関わっていることを知り、現在よりも深刻にとらえるべきだと思った。もう一つは大学生である私達にも地球温暖化を抑制するためにできることがまだまだあるということだった。普段の買い物ではつい値段の安いものを選んでしまいがちだが、いいものを長く使うことを心がけるだけでも地球温暖化の抑制につながるとしり、気を付けようと思った。寮やアパート、大学など、大学生であれば毎日利用する施設で省エネを取り入れることは、学生の環境への意識を変えるという意味でも重要だと感じた。</p>			

学籍番号・氏名	20A4033C 橋本 誠	学部	農
<p>今回の授業では、地球温暖化の現状と、また日本の取り組みが遅れているということが分かった。例えば、ドイツや中国では、ガソリン車を販売禁止にする事が決まっていることをしって、電気自動車や燃料電池自動車などはもっと未来の技術だと思っていたので、外国ではもうだいぶ進んでいるのだと感じた。それと同時に、日本ではそういった取り組みが遅れているのだと感じた。</p> <p>原子力の利用について、今回の授業で発電コストが高い、廃棄物の処分などの問題があることが分かったが、温暖化による気候変動などの危機が迫っている中、日本は発電の80%を火力発電に頼っており、この割合を早く減らす必要があると思う。そのためには、最終的には再生可能エネルギーに移行するとして、一時的に原子力を利用することもありなのではないかと思った。</p>			
学籍番号・氏名	19F2048K 堀内 勇輝	学部	繊維
<p>世界が協力して解決しなければならない問題の一つとして地球温暖化があげられるが、その原因の一つとして空気中の二酸化炭素が増加していることだとされている。二酸化炭素はガソリン車の排気ガスに多く含まれている等の理由から多くの国ではガソリン・ディーゼル車の販売を早いところでは2021年から販売禁止にして車から出る二酸化炭素を減らそうと努力している。ただ電気自動車にしてもその電気はどこから持ってくるのだろうかと思った。しかしこんなに話題に上がっていて大きな問題になっているのに温暖化がすぐには解決しないのは予想されているのとしては「昨日の今日で発生した問題ではなく、今まで積み重ねてきたのが表面に出てきたから」、「加害者と被害者が同じ」、「排出することに特別罪悪感を感じることはないから」、「規模が世界のためによる個人の無力感」と出ていて、自分にも当てはまるのがあって納得してしまいました。</p>			

学籍番号・氏名	20F1034K 杉浦 太一	学部	繊維
<p>今回の講義を聞き、地球温暖化による影響と各国の対策について学ぶ事ができました。温暖化による影響は今までの講義などで学んでいましたが、影響が大きい国を見ることは無かったので勉強になりました。また、1.5℃と2℃との影響の違いにも驚きました。たった0.5℃の違いで北極の海水消滅の回数や、珊瑚礁の死滅量に大きな違いが出るとは思いませんでした。また、各国の温暖化対策について学んでいくと、日本では温暖化対策の技術は進んでいるが法律ではまだ追いついていないと感じられました。その反面、外国では温暖化対策の法律を進んで制定していると感じました。</p>			
学籍番号・氏名	20F2026D 光部 翔貴	学部	繊維
<p>今回の講義の内容は主にパリ協定の内容でした。環境の授業をたくさんとっているため、よく知る内容でしたが、今回特に興味深かった内容は他国のガソリン車の販売禁止についてです。つい最近、日本でも2030年にガソリン車の販売を禁止が決まりました。この時、疑問に思ったことは、販売禁止をした後のガソリン車の完全廃止までかかる時間とガソリンスタンドの処理です。販売禁止をした後でも、その後、約20年はガソリン自動車は走り続けるでしょう。そのため、ガソリンスタンドも残さざるを得なくなると思います。そしたら直接は温室効果ガスを出してはいませんが、維持費などに無駄なコストをかけてしまうと思いました。またガソリンスタンドを撤去するのもかなり費用が掛かると聞きました。ガソリンスタンドをそのまま電気スタンドにするという考えもできますが、電気自動車の充電は時間がかかるのと同時に、あまり利益が上がらず経営は厳しいと思います。それ等の問題を改善すると、一体何年後に完全にガソリン車がなくなるのでしょうか？ ガソリン車が完全になくなるまでに、火力発電などの再生可能エネルギーを利用しない発電も今より大幅に減る、もしくはなくならなければならないとも思いました。</p>			

学籍番号・氏名	20F2032J 酒井 克樹	学部	繊維
<p>今日の講義で、これからの時代において必要となってくる「エネルギーの地産地消」という考え方を学ぶことが出来ました。今日の講義ではじめて聞く話もたくさんありました。その一つがグリーン熱の利用です。太陽の熱を用いた温水器はコストも良く、エコにもつながると思いました。特に私の地元である兵庫県姫路市は瀬戸内に位置しているため年間の日照量が多く、太陽熱温水器の利用に適していると思いました。また、日本では当たり前になっている自動販売機が電力の無駄遣いになっているという話は目から鱗でした。確かに考えてみれば 24 時間 365 日灯りやヒーターがつきっぱなしというのは明らかに電気の無駄だと思えます。そして日本にある自動販売機の数の他国と比べたときの多さに驚きました。さらに世界で行われている様々なエコ活動についても知ることが出来ました。飲み物の瓶による再利用や品物の包装を最低限にするなど、日本も見習うべきだと思いました。大量生産、大量消費による経済成長が約束されていた時代はもう無く、これからは持続可能な社会の実現のために世界中が力を合わせていかなければならないのだと思いました。</p>			
学籍番号・氏名	20F3010C 岩下 颯太	学部	繊維
<p>家庭では電気から二酸化炭素排出量が多く驚いた。グリーンランドの氷がすべて溶けると千葉県が島のように孤立してしまうことに危機感を覚えた。自分たちのすべきことをよく鑑みて生きていきたい。産業革命を部分的に否定「ゼロ炭素」という新しい価値観で産業を刷新していき、次世代のことを考えた社会にしていきたい。既に二酸化炭素実質排出量がブータンがゼロになっていて驚いた。なぜ農作業が電気のできないのか気になる。</p>			

学籍番号・氏名	20F3070G 多田 圭佑	学部	繊維
<p>今回の「資源・エネルギーの地産地消が持続可能な社会を創る」の講義を受けて、日本の環境取り組みの遅さについてよくわかりました。まずガソリン車・ディーゼル車の販売禁止を宣言している国がこんなに多いことに非常に驚きました。電気自動車や水素自動車の開発が進んでいるとはいえ、現在日本の中でそのような車を見ることはほとんどなく、まだまだガソリン車が活躍すると考えていたので、自分が車を買う時期にはもう販売禁止になっている国があることを知って、そういった取り組みを行わなければならない時がすぐそこまで近づいているのだと改めて思いました。</p> <p>もう一つ今回の講義で驚いたことは、太陽光や風力の発電コストが原子力よりも遙かに安いということです。やはり再生可能エネルギーが広まらない理由は、多くのコストがかかってしまうという問題があるからだと思っていましたので、一番安く電気を作れると言われていた原子力の何倍も安く電気を作れることを知って、国土の狭い日本では大変なこともあるかもしれませんが、再生可能エネルギーの導入をどんどん進めていくべきだと強く思いました。</p> <p>それと今回の講義で、日本はまだ環境に対する取り組みができていないと感じました。他の講義の中でも日本の取り組みは遅れていると言われたことがありましたが、遅れているといっても先進国である日本がそこまで悪くはないだろうと思っていました。ですが、ガソリン車の禁止や火力発電に頼っていること、風力発電の導入などをデータで改めて見てみると、先進国どころか途上国よりも遅れていることがよくわかりました。まず自分が一消費者とできることを探して、環境に対する取り組みに貢献していけたらいいなと思います。</p>			
学籍番号・氏名	20F3091K 淵野 祐史	学部	繊維
<p>現在地球では地球規模の問題がいくつも生じていることを改めて知った。地球温暖化による異常気象や海面上昇、人為的窒素固定による地下水汚染、プラスチックの大量消費による海洋汚染、食品ロス問題等の様々な問題と解決策について解説していただき、俯瞰的に問題全体を理解できたと思う。今回の講義で考えたことは二つある。まず一つ目は、人間がまだ気づいていない問題がもっとあるのではないかと思った。今回初めて人為的窒素固定量が過剰であるために、地下水の汚染を引き起こしているという問題を知った。窒素は空気の78%存在し、今まで人体には無害なものだと思っていたが、窒素化合物を過剰に摂取してしまうと健康を害するそうであり、今まで無害だと思っていたものでも過剰になると有害になるのだと思った。そこで、一般的に安全だと思われるものも実は過剰になると危険になるのではないかと考えた。例えば、木材を燃やした時に出る灰は肥料に使えるから安全だと思っている人も多いのではないだろうか。実は、長い年月をかけて成長した木材を燃やすと、その灰には植物の成長に必要な重金属(Pb,Cd,Hg)が含まれているそうだ。これらが過剰にたまる肥料としてそのまま利用することは難しくなるそうだ。「火力発電は悪、再生可能エネルギーは善」と考える風潮があると思うが、本当に再生可能エネルギーが地球にやさしいのか精査する必要があると思った。二つ目は、自分の生活を持続可能にするためにどうすればよいのかということである。講師の方は太陽光発電や太陽熱温水器を使用しているとおっしゃっていたが、私の家には太陽光発電をするスペースはないため導入することができない。地球環境を維持するために手軽にできる解決策について知りたいと思った。</p>			

学籍番号・氏名	20F4006A 石黒 佳桜	学部	繊維
<p>講義を受ける前と受けた後で、自分の間違った認識が何個か見付き、本当の世界の状況を理解できたと思いました。まず日本の温室効果ガスの排出量は世界各国と比べて少ないなと感じました。しかしそれは決して日本の温室効果ガスの排出量が少ないのではなく、中国など、主な排出国となっている国の排出量が考えられないくらい多いからなのだとすることは忘れないようにしていきたいです。また、一番印象的だったのは温室効果ガス排出トップ10の国だけで世界の排出量の7割に達するという事です。もちろん先進国の排出量の方が遥かに多いのだろうとは思っていましたがここまでとは思ってなく、この状態では発展途上国が不満を持つてしまうのも仕方ないことだと思いました。その点で平等とは難しいことだと思し、地球温暖化対策を進めていくために、先進国と発展途上国が互いに寛大に妥協していきなだら協力していくということが何よりも大事なんだと感じました。</p>			
学籍番号・氏名	20F4027C 杉本 麗旺	学部	繊維
<p>今回の講義を受けて自然やエネルギーの観点から、温暖化に対しての各国の取り組み状況やゴールとする目標地点を知ることができた。中でも一番印象に残ったことは世界的に見て、日本の温暖化に対する取り組みは遅れているということである。このことは、日本人は温暖化の問題について他人事のように思っていることに原因があるのではないかと思った。私自身も例えば、海面上昇についての問題はツバルという国が沈んでしまうこととしか思っておらず、『1mの海面の上昇で日本の海岸の90%が失われる』ということを知り、驚いた。また、日本の削減目標が1990年比でみると、EUの半分にも届いておらず、アメリカとも大差がないことにはとても衝撃を受けた。大学生になるまで多くのことを学び、気候問題についてもある程度の知識を持っていると思っていたが、まだ知らないことも多く勉強になった。平澤さんが講義の最後の方でおっしゃっていた“消費者の選択が社会を変える”ということが、日本を変えていくことに必要不可欠であると思う。そのためには今回の講義で知ることができた話を広めて、驚きを共有することで行動を変える人が急激に増えていくと思う。受動的に聞く状態から能動的に行動していくことが今、日本に求められていると感じた。</p>			